

知り、気づき、行動する力に

人権教育部会授業研究会

子どもたちは、学校で学ぶより先にインターネットで部落差別に出合ってしまう。そのときに、「ん？」と引っかかり、「おかしい」と怒りをもてる子どもたちであってほしいと願い、2月に猪名川町内の小学校で「インターネット上における差別の現実から学ぼう」というテーマで授業研究会をおこなった。耕しがなければ、差別のばらまきになる。本音で語り合える学級をめざし、普段から「ツツル」（自分の思いを正直に文章で表すとりくみ）やさまざまな学習・場面で立ち止まり、考えながら過ごしてきた。

実際に投稿された動画のサムネイル画面を見せた瞬間、「え？“潜入”？」、「嫌な感じがする」とつぶやく6年生。「パッと見て、部落差別の動画って気づく？」、「気づかん」「誰にむけて」出されているのか？差別は利害関係によって発生し、得をする人がいる。「そうした動画に出合ったらどうする？」と問うと、一番多かったのは「通報する」という意見だが、こんな意見もあった。「友だちとかと協力して最終的に通報」、「コメントしたらだめ。利益になるし、投稿者につたわるかわからないから」、「お母さん、お父さんに見せる。その方がいい方の拡散をしそう」。おかしいと思ったときに、相談できるつながりがあることは大事だ。「見ないと内容がわからない。でも、見たら再生回数増える」…部落差別がお金もうけの道具にされ、自分も加担してしまう…でも見ずに決めつけるのは…と、子どもの中に葛藤があった。ここで膨らませられたらもっと自分ごととして深まったのではないかと反省が残る。この授業を通して、

「通報したのに動画が消されないって、結局差別を助けることにつながるな〜」

「ネットにも部落差別が出てくるってやばくない？終わってんなあ〜」

「悪いイメージをいいイメージに変えるのは、人が動かないと変わらない」

「今までネットとかだったらスルーとかがいいと思ってたけど、リアルと変わらずに声を上げるのが大事だとわかった」

と、今の課題に気づいていた。また、部落差別解消にむけての大事な視点も見えた。

「自分が前に住んでいた街も、ネットで変な感じの話をよく聞くし、やっぱり自分が大切にしている町（物とか）が変に扱われるのは、すごく腹が立つなって思う」

この思いこそ、原点ではないかと思う。私たちはどうしても“多数派”に立つことが多い。でも、だからこそ多数派として、解消にむけてできることをやっていく必要があるのだとも思う。

「みんな、〇〇しそうな人ランキングってどう思う？」、「人に順位つけたらあかんやろ！」、「周りが勝手に決めつけてるやん」子どもの中に、引っかかる力がついてきている。そこから、今、社会や身のまわりで気になっていることなど、“自分の”課題を見つけてほしいと願っている。周りをほったらかしにしない人であってほしいし、自分が行動することで、差別をなくす力になることを感じてほしい。



(本授業の授業案は「組合員専用ページ」⇒「各部会研究授業 指導案等」に掲載しています。

ID・パスワードは各地域組合へお問い合わせください。)

★兵教組 HP 組合員専用ページ⇒

